

墓

正岡子規

青空文庫

○こう生きて居たからとて面白い事もないから、ちよつと死んで来られるなら一年間位地獄漫遊と出かけて、一周忌の祭の真中へヒヨコと帰つて来て地獄土産の演説などは甚だしやれてる訳だが、しかし死にツきりの引導いんどう渡されツきりでは余り有難くないね。けれど有難くないの何のと贅ぜいたく沢をいつて見たところで、諸行無常老少不定というので鬼が火の車引いて迎えに来りや今夜にも是非とも死ななければならぬ。明日の晩実は柳橋で御馳走になる約束があるのだが一日だけ日延ひのべしてはくれまいかと願つて見たとて鬼の事だからまさか承知しまいな。もつとも地獄の沙汰さたも金次第というから犢鼻禪ふんどしのカクシへおひねりを一つ投げこめば鬼の

角も折れない事はあるまいがあいにく生憎今は十銭の銀貨もないヤ。な
いとして見りヤうかとはして居られない。是非死ぬとなりヤ遺言
もしたいし辞世の一つも残さなけりヤ外聞が悪いし………ヤ
ア何だか次の間に大勢よつて騒いで居るナ「ビヨウキキトク」な
んていう電報を掛けるとか何とかいつてるのだろう。ナニ耳のそ
ばで誰やら話ししかけるようだ、何かいう事ないか、いう事ない
でもない 借金の事どうかお頼み申すヨ、それきりか、僕はまんじ饅
ゆう頭が好きだから死んだらなるべく沢山盛つて供えてもらいたい、
それは承知したが辞世はないか、それサ辞世の歌一首詠もうと思
つたが間に合わないから十七字に変えて見たがやはりまだ五字出
来ないので、五文字出来なけりヤ十二字でも善いじやないか

言つて見たまえ、そんなら言つて見よか「屁へをひつて尻をすぼめ
 ず」というのだ 何か下五文字つけてくれ、笑つてちやいけない
 ヨ、それじゃネ萩の花と置いてはどうだ、そりやどういふ訳だ、
 どういふ訳もないけれど外に置きようはなしサ 今萩がさかりだ
 から萩の花サ、そんな訳の分らぬのは困るヨ、じゃ君屁へひり虫と
 いうのはどうだ 屁ひり虫は秋の季になつてるから、屁をひつて
 尻をすぼめず屁ひり虫か そいつは余りつまらないじやないか、
 つまらないたツて困つたナ それじゃこれではどうだ 屁をひつ
 てすぼめぬ穴すすきの芒かなサ、少し善ければそれで我慢して置いて安
 楽に往生するサ 迷わずに往つてくれたまえ、迷つたら帰つて来
 るヨ………イヤに静かになつた。誰やらクシクシ泣いてるよう

だ。抹^{まつこう}香の匂いがしやアガラ。この匂いは生きてる内から余り好きでもなかつたが死んで後もやはり善くないヨ 何だか胸につまるようで。胸につまるといえばからだが窮屈だね。こりヤ櫛^{しきみ}の葉でおれのからだを詰めたに違いない。棺を詰めるのは花にしてくれといって置くのを忘れたから今更仕方がない。オヤ動き出したぞ。墓地へ行くのだナ。人の足音や車の軋^{きし}る音で察するに会葬者は約百人、新聞流でいえば無慮^{むりよ}三百人はあるだろう。先ずおれの葬式として不足も言えまい。……………アアようよう死に心地になった。さつき柩^{ひつぎ}を昇^かき出されたまでは覚えて居たが、その後は道々棺で揺られたのと寺で鐘太鼓ではやされたので全く逆上してしまって、惜^{かな}い哉木蓮屁茶居士などというのはかすかに聞

えたが、その後は人事不省だった。少し今、ガタという音で始めて気がついたが、いよいよこりや三尺地の下に埋められたと見えるテ。静かだツて淋しいツてまるで娑婆しやばでいう寂莫せきぼくだの蕭しょうし森んだのとは違つてるよ。地獄の空気はたしかに死んでるに違いない。ヤ音がするゴーというのは汽車のようだがこれが十万億土を横貫したという汽車かも知れない。それなら時々地獄極楽を見物にいつて気晴らしするもおつだが、しかし方角が分らないテ。めつたに闇の中を歩行あるいて血の池なんかに落ちようものなら百年目だ、こんな事なら円遊くわに細くわしく聞いて来るのだツた。オヤ鼻ふくろうが鳴く。何でも気味の善い鳥とは思わなかったが、道理で地獄で鳴いてる鳥じゃもの。今日は弔とむらわれのくたびれで眠くなつて来た：

……もう朝になったかしら、少し薄あかるくなつたようだ。誰かはや来て居るよ。ハア植木屋がかなめを植えに来たと見える。しかしゆうべまであつた花はどうしたろう、生花も造花もなんにも一つもないよ。何やら盛物もりものもあつたがそれも見えない。きつと乞食が取つたか、この近辺の子が持つて往たのだろう。これだから日本は困るといふのだ。社会の公德というものが少しも行われて居らぬ。西洋の話の聞くと公園の真中に草花がつくつてある。それには垣も囲いもなんにもない。多くの人はその傍かたわらを散歩して居る。それでもその花一つ取る者は仮にもない。どんな子供でも決して取るなんといふ事はないそうだ。それが日本ではどうだ。白壁があつたら楽書らくがきするものときまつて居る。道端や公園の花

は折り取るものにきまつて居る。もし巡查が居なければ公園に花の咲く木は絶えてしまふだろう。殊ことに死人の墓にまで来て花や盛物を盗む。盗んでも彼らは不徳義とも思やせぬ。むしろ正当のように思つてる。如何に無教育の下等社会だつて………しかし貧民の身になつて考て見るとこの窃盗罪の内に多少の正理が包まれて居ない事もない。墓場の鴉からすの腸を肥すほどの物があるなら墓場の近辺の貧民を賑にぎわしてやるが善いじゃないか。貧民いかに正直なりともおのれが飢える飢えぬの境に至つて墓場の鴉に忠義だてするにも及ぶまい。花はとにかく、供え物を取るのは決して無理ではない。西洋の公園でも花だから誰も取らずに置くがもしパンを落して置いたらどうであろう。きつとまたたく間になくなつて

しまうに違いない。して見れば西洋の公德というのも有形的であつて精神的ではない………ヤ大勢来やがった。誰かと思えばやはりきのうの連中だ。アア深切なものだ。皆くたびれて居るだらうけれどそれにも構わず墓の検分に来てくれたのだ。実に有り難い。諸君。諸君には見えないだろうが僕は草葉の陰かげから諸君の厚こ誼うぎを謝して居るよ。去る者は日々に疎うとしといつてなかなか死者に對する礼はつくされぬものだ。僕も生前に経験がある。死んだ友達の墓へ一度参つたきりでその後参ろう参ろうと思つて居ながらとうとう出来ないでしまった。僕は地下から諸君の万歳を祈つて居る。………今日は誰も来ないと思つたら、イヤ素すてき的な奴が来た。蘭麝らんじゃの薰かおりただならぬという代物しろもの、オヤ小つまか。小

つまが来ようとは思わなかった。なるほど娑婆に居る時に爪弾つまびきの二三さんさ下りか何かで心意気の一つも聞かした事もある。聞かされた事もある。忘れもしないが自分の誕生日の夜だった。もう秋の末で薄寒い頃にあわせにじゆばん襦袢で震えて居るのに、どうしたかいくら口をかけてもお前は来てくれず、夜はしみじみと更ふける寒さは増す、独りグイ飲みのやけ酒という気味で、もう帰ろうと思つてるとお前が丁度やつて来たから狸寝入でそこにくらがって居ると、才前がいろいろにしておれを揺ゆり起したけれどおれは強情に起きないで居た。すると後にはお前の方で腹立って出て往こうとするから、今度はこつちから呼びとめたが帰って来ない。とうとうおかみの仲裁でやつとお前が出て来てくれた時、おれがあやまった

ら、お前が気の毒がつて、あなたほんとうにあやまるのですか、
それでは私がすみません、私の方からあやまります、というので、
ジツと手を握られた時は少しポツとしたよ。地獄ではノロケが禁
じてあるから深くはいわないが、あの時はほんとうにもう命もい
らないとまで思ったね。したがお前の心を探つて見ると、一旦は
軽はずみに許したが男のいう言は一度位ではあてにならぬと少し
引きしめたように見えたので、こちらも意地になり、女の早はせ
ぬといったような顔して、疎遠になるとなく疎遠になつて居たの
だが、今考えりやおれが悪かつた。お前が線香たててくれるとは
実に思いがけなかつた。オヤまた女が来た。小つまの連つれかと思つ
たら白眼みあいになれ違つた。ヤヤヤみいちゃんじゃないか。今

日はまあどうしたのだろう。みいちゃんに逢つては実に合す顔がない。みいちゃんも言いたい事があるであろう。こちらも話したい事は山々あるが最^もう話しする事の出来ない身の上となつてしまつた。よし話が出来たところが今更いつてもみんな愚痴^{ぐち}に墮^おちてしまふ。いわばいうだけ涙の種だから何んにもいわぬ。ただここからお詫^わびをするまでだ。みいちゃんの一生を誤つたのは僕だ。

まだ肩あげがあつて桃われが善く似あうと人がいつた位の無垢清浄玉の如きみいちゃんを邪道に引き入れた悪魔は僕だ。悪魔、悪魔には違いないがしかしその時自分を悪魔とも思わないしまたみいちゃんを魔道に引き入れるとも思わなかつた。この間の消息を知つてゐる者は神様と我々二人ばかりだ。人間世界にありうちの卑

しい考は少しもなかつたのだから罪はないような者であるが、そこにはいろいろの事情があつて、一枚の肖像画から一編の小説になるほどの葛藤かつとうが起つたのである。その秘密はまだ話されない。恐らくはいつまでたつても話さるる事はあるまい。かような秘密がいくつとなくこの墓地の中に葬られて居るであろうと思うと、それを聞きたくもあるし、自分のも話したいが、話して後にも生き還ると義理が悪いからやはり秘密にしておくも善かろう。とにかく今日は艶福えんぷくの多い日だつた。………日の立つのは早いもので最もう自分が死んでから一周忌も過ぎた。友達が醜き金よきんして拵こしらえてくれた石塔も立派に出来た。四角な台石の上に大理石の丸いのは少ちとしやれ過ぎたがなかなか骨は折れて居る。

彼らが死者に対して厚いのは実に感ずべき者だ。が先日ここで落ちあつた二人の話で見ると、石塔は建てたが遺稿は出来ないという事だ。本屋へ話したが引き受けるという者はなし、友達から醵金するといつても今石塔がやつと出来たばかりでまた金出してくれともいえず、来年の年忌にでもなつたらまた工夫もつくであろうという事であつた。何だか心細い話ではあるがしかし遺稿を一年早く出したからって別に名誉という訳でもないから来年でも出来さえすりや結構だ。しかし先日鬼が笑つて居たから氣にならなくてもないがどうせ死んでから自由は利かないサ。ただあきらめて居るばかりだ。時に近頃隣の方が大分騒がしいが何でも華族か何かかやって来たようだ。華族といや大そうなようだが引導一

つ渡されりや華族様も平民様もありやアしない。妻子珍宝及王位、
臨命終時不隨者といふので御釈迦様はすました者だけれど、なか
なかそうは覺悟しても居ないから凡夫の御台様みだいさまや御姫様はさぞ
泣きどおしで居られるであらう。可哀想に、華族様だけは長いき
させてあげても善いのだが、死に神は賄賂わいろも何も取らないから仕
方がない。華族様なんぞは平生苦勞を知らない代りに死ぎわに際なん
て来たらうろたえた事であらう。可哀想だが取り返しもつかない
サ。正三位勲二等などと大きな墓表を建てたツて土の下三尺下り
や何のききめもあるものでない。地獄では我々が古參だから頭下
げて来るなら地獄の案内教えてやらないものでもないが、生意氣
に広い墓地を占領して、死んで後までも華族風を吹かすのは氣に

くわないヨ。元来墓地には制限を置かねばならぬというのが我輩の持論だが、今日のように人口が繁殖して来る際に墓地の如き不生産的地所が殖ふえるというのは厄やっかい介極まる話だ。何も墓地を広くしないからツて死者に対する礼を欠くという訳はない。華族が一人死ぬると長屋の十軒も建つほどの地面を塞ふさげて、甚だけしからん、といつて独り議論したツて始まらないや。ドレ一寝入しよるか。……………アア淋しい淋しい。この頃は忌日が来ようが孟蘭盆うらぼんが来ようが誰一人来る者もない。最も此処ここへ来てから足かけ五年だからナ。遺稿はどうしたかしらん 大方出来ないのは極つてる。誰も墓参りにも来ない者が遺稿の事など世話してくれる者はない。お隣の華族様も最う大分地獄馴なれて蚯蚓みみずの小便の味も

覚えられたであろう。淋しいのは少しも苦にならないけれど、人が来ないので世上の様子がさっぱり分らないには困る。友だちは何として居るかしらッ。小つまは勤めて居るなら最う善いかげんの婆さんになつたらう。みいちゃんは婚礼したかどうかしらッ。市区改正はどれだけ^{はかど}撈取つたか、市街鉄道は架空蓄電式になつたか、それとも^{あつさく}空気圧^{あつさく}搾式になつたかしらッ。中央鉄道は聯絡したかしらッ。支那問題はどうかしらう。藩閥は最う破れたかしらッ。元老も大分死んでしまつたらう。自分が死ぬる時は星の全盛時代であつたが今は誰の時代かしらッ。オー寒い寒い何だかいやに寒くなつてきた。どこやらから^{しやば}娑婆の寒い風を吹きつけて来る。先日の雨に此処の地盤が崩れたと見えて、こおろぎの聲が近

く聞えるのだが誰も修理に来る者などはありやしない。オヤ誰か来やがった。夜になってから詩を吟じながらやって来るのは書生に違いないが、オヤおれの墓の前に立って月明りに字を読んで居やがるな。氣障きざな墓だなんて独り言いつて居やがらア。オヤ恐ろしい音をさせアがった。石塔の石を突きころがしたナ。失敬千ワナ。こんな奴が居るから幽霊に出たくなるのだ。ちよつと幽霊に出てあいつをおどかしてやろうか。しかし近頃は慾の深い奴が多いから、幽霊が居るなら一つふんじばつて浅草公園第六区に出してやろうなんていうので幽霊捕縛あに歩あるいて居るかもしれないから、うっかり出られないが、失敬ナ、悠々と詩を吟じながら往つてしまやがった。この頃此処へ来る奴にろくな奴はないよ。きの

うも珍らしく色の青い眼鏡かけた書生が来て何か頻りに石塔を眺^{なが}めて居たと思つたら、今度或る雑誌に墓という題が出たのでその材料を捜しに来たのであつた。何でも今の奴は只は来^{ただ}ないよ。たまに只来た奴があると石塔をころがしたりしやアがる。始末にいけない。オー寒いぞ寒いぞ。寒いツつてもう粟粒の出来る皮もなしサ。身の毛がよだつという身の毛もないのだが、いわゆる骨にしみるというやつだネ。馬鹿に寒い。オヤオヤ馬鹿に寒いと思つたら、あばら骨に月がさして居らア。

○僕が死んだら道端か原の真中に葬つて土饅頭を築いて野のいばら茨を植えてもらいたい。石を建てるのはいやだがやむなくば沢庵石のようなごろごろした白い石を三つか四つかころがして置くばかりにしてもらおう。もしそれも出来なければ円形か四角か六角かにきつぱり切つた石を建ててもらいたい。彼自然石という薄ツペラな石に字の沢山彫つてあるのは大々嫌いだ。石を建てても碑文だの碑銘だのいうは全く御免蒙こうむりたい。句や歌を彫る事は七里ケツパイいやだ。もし名前でも彫るならなるべく字数を少くして悉ことごとく篆字てんじにしてもらいたい。楷書いや。仮名は猶なおよら更。

〔『ホトトギス』第二卷第十二号 明治32・9・10〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二巻」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第二巻第十二号」

1899（明治32）年9月10日

※底本では、表題の下に「落語生」と記載されています。

入力：ゆうぎ

校正：・noriko saito

2010年9月6日作成

2011年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

墓

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>